

公開研究会開催報告：「心の声」と「自由話法」

—イメージ・文学・言葉—

阿 部 宏

私は他大学を定年退職後、有り難くも今年度（2025年4月）から学芸学部・人間文化学科に特任教授として採用していただきました。

着任早々から八木祐子先生と間瀬幸江先生に誘われる形で、他民族研究グループに加わりました。さらにこの度、研究発表「心の声」と「自由話法」—イメージ・文学・言葉—（2月10日）の機会までいただきました。

一般的には、教員は他大学に所属が変わっても自分の専門、つまり同じ内容を教授することになるのではないのでしょうか？しかし、私の専門はフランス語学・文学ですが、宮城学院の各クラスではフランス語履修者はごく少数派です。したがって、授業内容（ヨーロッパ文化論）をほぼゼロから構築することとなりました。

数年前に主催したあるシンポジウムで、某先生から「マンガ学」なる研究分野が国内外で充実した成果を挙げていることを教えていただき、それ以来ずっと気になっていました。近年、マンガ、写真、映像、文学、言葉などに共通の原理を模索することが可能になったのは、20世紀末にその立場を確立した認知言語学のおかげかもしれません。

今年度後期から、全学部の学生を対象とした「リベラルアーツ総合「声」」の授業をピンチヒッター的に担当いたしました。振り返れば50歳前後の頃だったどうか、義理や人情に流される受身の生き方こそが、むしろ結果的に自らに糧をもたらす、ような気づきもあったのです。

以上の諸事情が重なって、「言葉における主観性」、「日欧語の話法の相違」、「言葉と外界認知」などこれまで散発的に関心を寄せてきた分野が、なぜか有機的に関連してきて、一つのテーマに収斂つありました。ちょうどよいタイミングで、発表の機会をいただいたと思っています。

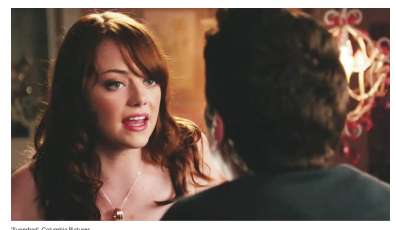
お話ししたのは、以下のような内容です。言語コミュニケーションにおいて話者は同一であっても各発話の責任主体は必ずしも均質ではなく、複数ありうるのではなかろうか？例えば、客観的な情報伝達、（独白など）自己中心の主観性、（欧米語の自由間接話法など）作中人物の主観性と客観性が重なり合うケースなど、またこれらは映像ではそれぞれ以下に対応するのではなかろうか？



（登呂遺跡、客観性）



（Point of View Shot、主観性）



（Over the Shoulder Shot、主観性+客観性）

質疑応答では、多くの刺激的な指摘をいただきました。手書き文字、人称、自由間接話法の発話主体、インドの民謡、小説と身体性、などなど。会の終了後に間瀬先生に別室で懇談の機会を設定していただいたのですが、某学生から言葉と手話との関係性について質問がありました。あまりに唐突で戸惑ったのですが、話しているうちに興味深い研究テーマであることがわかってきました。また、外部からわざわざ参加していただいた私の元教え子からは、Point of View と Over the Shoulder に関する示唆的な情報もいただきました。

試験問題作成やその採点、またそれが終わるや否や入試関連の作業に駆り出されている中で、先生方や丑田副手にお集まりいただきました。感謝しかありません。巨大予算が動きトップダウンで決められる人工的学際性は形式的なもので終わりがちですが、本当の意味での多分野融合は草の根的なところから胚芽するのではないのでしょうか？キリスト教文化研究所の維持・発展を祈るものです。また不肖私も、微力ながら貢献したいと思います。